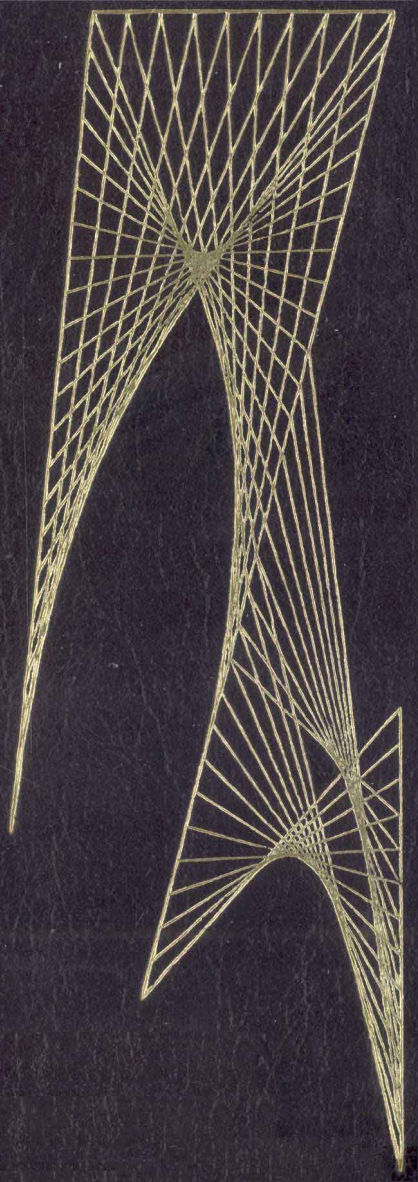
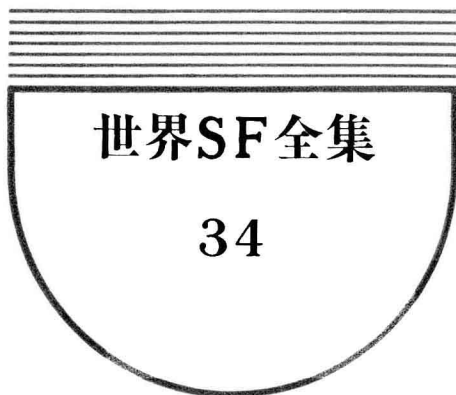






日本のSF (短篇集) 古典篇

石川喬司編



早川書房

世界SF全集 34

日本のSF（短篇集）古典篇

石川喬司編

〈検印廃止〉

1976年7月10日再版印刷 1976年7月15日再版発行

発行者 早川 清 東京都千代田区神田多町2〜2

発行所 株式会社早川書房 東京都千代田区神田多町2〜2

電話 東京(254)1551(代) 振替 東京6-47799

印刷所・株式会社享有堂印刷所 製本所・株式会社明光社

本文用紙・本州製紙株式会社

表紙クロス・日本クロス工業株式会社

函紙・富士加工製紙株式会社

製函所・株式会社佐藤製函所

定価 1800円

〈乱丁本・落丁本は本社にてお取り替えいたします〉

日本のSF

(短篇集)

古典篇

編者
石川
喬
司

目 次

第一部

押絵と旅する男	江戸川乱歩	11
鏡地獄	江戸川乱歩	29
恋愛曲線	小酒井不木	43
人造人間	平林初之輔	57
灰色にぼかされた結婚	木津登良	71
ロボットとベッドの重量	直木三十五	84
兵隊の死	渡辺 温	96
振動魔	海野十三	98
十八時の音楽浴	海野十三	116
特許多腕人間方式	海野十三	149
髪切虫	夢野久作	164

人間レコード	夢野久作	170
卵	夢野久作	182
「太平洋漏水孔」漂流記	小栗虫太郎	187
音波の殺人	野村胡堂	207
せんとらる地球市建設記録	星田三平	226
七時〇三分	牧逸馬	262
地底獣国	久生十蘭	301
網膜脈視症	木々高太郎	346
ニッポン遺跡(抄)	大下宇陀児	364
二千六百万年後	横溝正史	383
脳波操縦士	蘭郁二郎	395
ジャマイカ氏の実験	城昌幸	413

第二部

みなごろしの歌		渡辺啓助	425
月航路第一号		北村小松	437
オラン・ペンデクの復讐		香山滋	450
オラン・ペンデク後日譚		香山滋	469
銀河鉄道の夜		宮沢賢治	495
覺海上人天狗になる事		谷崎潤一郎	541
抒情歌		川端康成	545
微笑		横光利一	564
一千一秒物語(抄)		稲垣足穂	590
似而非物語		稲垣足穂	597

東京日記	内田百閒	608
山月記	中島敦	640
かるやかな翼ある風の歌(抄)	立原道造	646
猿ヶ島	太宰治	662
夜長姫と耳男	坂口安吾	669
潜在意識の軌道	伊藤整	699
解説	石川喬司	709
函・扉・表紙／勝呂忠		

第一部

押絵と旅する男

江戸川乱歩

この話が私の夢か私の一時的狂気の幻でなかったなら、あの押絵と旅をしていた男こそ狂人であつたに違いない。だが、夢が時として、どこかこの世界と喰いちがった別の世界をチャリとのぞかせてくれるように、また、狂人が、われわれのまったく感じえぬものごとを見たり聞いたりすると同じに、これは私が、不可思議な大気のレンズ仕掛けを通して、一刹那、この世の視野のそとにある別の世界の隅を、ふと隙見したのであつたかもしれない。

いつももしれぬ、ある暖かい薄曇つた日のことである。それは、わざわざ魚津へ蜃気楼を見に出掛けた帰り途であつた。私がこの話をするとき、お前は魚津なんかへ行つたことではないじゃないかと、親しい友だちに突つ込まれることがある。そういわれてみると、私はいつの幾日に魚津へ行

つたのだと、ハッキリ証拠を示すことができぬ。それではやっぱり夢であつたのか。だが私はかつて、あのように濃厚な色彩を持った夢を見たことがない。夢の中の景色は、白黒の映画と同じに、まったく色彩をとまなわぬものであるのに、あの折の汽車の中の景色だけは、それもあの毒々しい押絵の画面が中心になって、紫と臙脂の勝つた色彩で、まるで蛇の眼のように、生々しく私の記憶に焼きついてゐる。着色映画の夢というものがあるのであろうか。

私はその時、生れてはじめて蜃気楼というものを見た。蛤の息の中に美しい竜宮城の浮かんではゐる、あの古風な絵を想像していた私は、本ものの蜃気楼を見て、膏汗のにじむような、恐怖に近い驚きにうたれた。

魚津の浜の松並木に、豆粒のような人間がウジャウジャと集まって、息を殺して、眼界いっぱいの大空と海面とをながめていた。私はあんな静かな、晒のようにだまつてゐる海を見たことがない。日本海は荒海と思ひこんでいた私には、それもひどく意外であつた。その海は、灰色で、まったく小波ひとつなく、無限の彼方にまでうちつづく沼かと思われた。そして、太平洋の海のように、水平線はなく、海と空とは、同じ灰色に溶け合い、厚さの知れぬ靄におおいつくされた感じであつた。空だとばかり思つていた

上部の靄の中を、案外にもそこが海面であつて、フワフワと幽霊のような大きな白帆がすべて行つたりした。

蜃気楼とは、乳色のフィルムの上に墨汁をたらして、それが自然にジワジワとにじんで行くのを、途方もなく巨大な映画にして、大空にうつし出したようなものであつた。はるかな能登半島の森林が、喰いちがった大気の変形レンズを通して、すぐ眼の前の大空に、焦点のよく合わぬ顕微鏡の下の黒い虫みたいに、曖昧に、しかもばかばかしく拡大されて、見る者の頭上におしかぶさってくるのであつた。それは、妙な形の黒雲と似ていたけれど、黒雲なればその所在がハッキリわかっているのに反し、蜃気楼は不思議にも、それと見る者との距離が非常に曖昧なのだ。遠くの海上にただよう大入道のようにでもあり、ともすれば、眼前一尺にせまる異形の靄かと見え、はては、見る者の角膜の表面にボツリと浮かんだ、一点の曇りのようにさえ感じられた。この距離の曖昧さが、蜃気楼に想像以上の無気味な気違いめいた感じを与えるのだ。

曖昧な形の、まっ黒な巨大な三角形が、塔のように積み重なつて行つたり、またたく間にくずれたり、横に延びて長い汽車のように走つたり、それがいくつかにくずれ、立ち並ぶアラビヤ杉の梢と見えたり、じつと動かぬようでい

ながら、いつとはなく、まったく違った形に化けて行つた。蜃気楼の魔力が、人間を気がいにするものであつたら、おそらく私は、少なくとも帰り途の汽車の中までは、その魔力を逃れることができなかったであらう。二時間の余も立ちつくして、大空の妖異をながめていた私は、その夕がた魚津をたつて、汽車の中に一夜を過ごすまで、まったく日常と異つた気持でいたことは確かである。もしかしたら、それは通り魔のように、人間の心をかすめおかすところの、一時的狂気のたぐいでもあつたのであらうか。

魚津の駅から上野への汽車に乗つたのは、夕がたの六時頃であつた。不思議な偶然であらうか、あの辺の汽車はいつでもそうなのか、私の乗った二等車（注、当時は三等まであつた）は、教会堂のようにガランとしていて、私のほかにたった一人の先客が、向こうの隅のクッションにうずくまつているばかりであつた。

汽車は淋しい海岸の、けわしい崖や砂浜の上を、単調な機械の音を響かせて、はてしもなく走っている。沼のような海上の靄の奥深く、黒血の色の夕焼が、ボンヤリと漂っていた。異様に大きく見える白帆が、その中を、夢のようにすべっていた。少しも風のない、むしむしする日であつたから、ところどころひらかれた汽車の窓から、進行につ

れて忍び込むそよ風も、幽霊のように尻切れとんぼであった。たくさんの短かいトンネルと雪除けの柱の列が、広漠たる灰色の空と海とを、縞目に区切って通り過ぎた。

親不知の断崖を通過するころ、車内の電燈と空の明かるさとが同じに感じられたほど、夕闇がせまってきた。ちょうどその時分、向こうの隅のたった一人の同乗者が、突然立ち上がって、クッションの上に大きな黒縞子の風呂敷をひろげ、窓に立てかけてあった、二尺に三尺ほどの扁平な荷物を、その中へ包みはじめた。それが私になんとやら奇妙な感じを与えたのである。

その扁平なものは多分絵の額に違いないのだが、その表側の方を、何か特別の意味でもあるらしく、窓ガラスに向けて立てかけてあった。いちど風呂敷に包んであったものをわざわざ取り出して、そんなふうにとに向けて立てかけたものとしか考えられなかった。それに、彼が再び包む時にチラと見たところによると、額の表面にえがかれた極彩色の絵が、妙になまなましく、なんとなく世の常ならず見えたことであつた。

私はあらためて、この変てこな荷物の持ち主を観察した。そして、持ち主その人が、荷物の異様さにもまして、一段と異様であつたことに驚かされた。

彼は非常に古風な、われわれの父親の若い時分の色あせた写真でしか見ることでできないような、襟の狭い、肩のすばけた、黒の背広服を着ていたが、しかしそれが、背が高くて足の長い彼に、妙にシツクリ似合つて、はなはだ意気にさえ見えたのである。顔は細面で、両眼が少しギラギラしすぎていたほかは、一体によく整つていて、スマートな感じであつた。そして、きれいに分けた頭髮が、豊かに黒々と光っているので、一見四十前後であつたが、よく注意してみると、顔じゅうにおびただしい皺があつて、ひと飛びに六十ぐらいにも見えぬこともなかった。その黒々とした頭髮と、色白の顔を縦横にきざんだ皺との対照が、はじめにそれに気づいた時、私をハッとさせたほど、非常に無気味な感じを与えた。

彼は丁寧に荷物を包み終ると、ひよいと私の方に顔を向けたが、ちょうど私の方でも熱心に相手の動作をながめていた時であつたから、二人の視線がガツチリとぶつつかつてしまった。すると、彼は何か恥かしそうに唇の隅を曲げて、かすかに笑ってみせるのであつた。私も思わず首を動かして挨拶を返した。

それから、小駅を二、三通過するあいだ、私たちはお互の隅にすわつたまま、遠くから、時々視線をまじえては、

気まずくそっぽを向くことを繰り返していた。そこはすっかり暗やみになっていた。窓ガラスに顔を押しつけてのぞいて見ても、時たま沖の漁船の舷燈が遠くポツリと浮かんでいるほかには、まったくなんの光もなかった。はてしない暗やみの中に、私たちの細長い車室だけが、たったひとつの世界のように、いつまでもいつまでも、ガタンガタンと動いて行つた。ほの暗い車室の中に、私たち二人だけを取り残して、全世界が、あらゆる生き物が、跡方もなく消えうせてしまった感じであつた。私たちの二等車には、どの駅からも一人の乗客もなかったし、列車ボーイや車掌も一度も姿を見せなかった。そういうことも今になって考えてみると、はなはだ奇怪に感じられるのである。

私は、四十歳にも六十歳にも見える、西洋の魔術師のような風采のその男が、だんだんこわくなつてきた。こわさというものは、ほかにまぎれる事柄のない場合には、無限に大きく、からだじゅういっぱいひろがって行くものである。私はついには、産毛うぶげの先までもこわさにみちて、たまらなくなつて、突然立ち上がると、向こうの隅のその男の方へツカツカと歩いて行つた。その男がいとわしく、恐ろしければこそ、私はその男に近づいて行つたのであつた。私は彼と向き合つたクッションへ、そつと腰をおろし、

近寄ればいっそう異様に見える彼の皺だらけの白い顔を、私自身が妖怪でもあるような一種不思議な顛倒した気持ちで、眼を細め息を殺して、じつと覗きこんだものである。男は、私が自分の席を立つた時から、ずっと眼で私を迎えるようにしていたが、そうして私が彼の顔をのぞきむと、待ち受けていたように、顎でかたわらの例の扁平な荷物を指し示し、なんの前おきもなく、さもそれが当然の挨拶でもあるように、

「これでございますか」

といった。その口調が、あまりあたりまえであつたので、私はかえつてギョツとしたほどであつた。

「これがごらんになりたいのでございましょう」

私がだまつているので、彼はもう一度同じことを繰り返した。

「見せてくださいますか」

私は相手の調子に引き込まれて、つい変なことをいつてしまった。私は決してその荷物を見たいために席を立つたわけではなかったのだけれど。

「喜んでお見せいたしますよ。わたくしは、さつきから考えていたのでございます。あなたはきっとこれを見にお出でなさるだろうとね」